

短歌

尾崎知光

みまつ会に寄せて

弥生の末 見待つと契りし 乙女わが 叡知のすみか 未末幸あれ
来む春も またも見待つと そのかみの 乙女らの声 すみて花やぐ
そのかみの みまつ乙女ら 桜さく 阿吽のうたげ うつつともなし

二〇〇六年

みまつ会にて

白髪の高木のうし 禿頭の山崎の君 瓢瓢と市橋のをぢ みな良き師 遠き世の人
ここに我 在りとふことの 不思議さよ 四十八年 止まるがごとし
みづほ丘 乙女ら嬉嬉と 学べりき その日その人 思いはつきず
通学の みちは菜の花 麦畑 小さきバスも 走りてありけり

二〇〇七年

みまつ会五十年彦根にて

春もなか 花の彦根 常若の みまつ友ら 逢はむとぞきく
春もなか みまつ友ら つどい来て 彦根の花を かざし遊ばむ
葉桜の 彦根は城も 街もよし みまつのは 五十年の春
弥生の末 見待つと契り 巢立ちしは 六十年なり されば睦和ぞ

二〇〇八年

瑞穂が丘追想

遠き日は 何ぞ懐かしく 悲しきや 木造の校舎 笹茂る古墳（やま）
郡道に 古き店店 神社あり 神の内とふ 名も残りけり

二〇〇九年

瑞穂が丘

桜咲く みまつに古き 学び舎を とへばかすかに 地霊はむせぶ

二〇一〇年

先生のうた

白髪の 市之助先生 常うたふ 命短し 恋せよ乙女
禿頭の 山崎のうし 唯一度 微吟せしうた 湯島の白梅

二〇一一年

二十八回みまつ会の集いに向けて

五十三年 つづきてなほも 栄えゆく みまつのは 世に類ひなし
今年もまた いよよ盛りの 人皆と 花のみまつに 逢はむよろこび

二〇一三年

二十九回みまつの会の集いに向けて

雪止みて 晴れまた雪と 春遠し 花のみまつの 便り待つ日々
寿を終ふる 卒寿といふ名 さがなけれ 鳩寿といひて 生さんとぞ思ふ

二〇一四年

年毎に 待ちこがれ居し みまつ会 その灯を 消さずあれかし

二〇一五年

みまつ会 未だ老いずて 遠くより 二十五名も 人集ひたり

二〇一六年

逢ふことの 難くなりぬる みまつ会 教へ子の姿に 思ひはせつつ

二〇一八年

*高木市之助先生・山崎敏夫先生・市橋鐸先生は、本学で教鞭を執られた国文学者

*「みまつ会」とは愛知県立女子大学国文学科第一期生と女子短期大学国文学科最終卒業生の同期会の名称

金子薫園と私

中学校二年生の時、古本で薫園の『歌に入る道』という本を見つけ、又『歌の作り方』という新本を買って読みました。

薫園はご存知のように落合直文の門人の一人で、若い時に旧派の歌を詠んでいた人ですが、その後一転して自然主義の歌をよむようになりました。当時まだ元気で新潮社の調査部長をしていました。

中学生の私は無謀にもその人に手紙を出して歌の指導を乞いました。相手にされる筈が無いと思っていたところ、返事が来て「毎月、二十首の詠を送れ。添削します。添削料は二円。」という内容でした。私は驚いてよろこび、毎月、語呂合せのような歌を送り、薫園はそれを丁寧に添削して返してくれました。その後、多少私も上達したため、毎月

二十首が却って出来なくなりました。それを見透していたように「名古屋には自分の高弟の小寺秋雨という者がいる。そこへ行つて指導を受けなさい」という返事が来ました。

秋雨はきびしい人で、私は秋雨の前でいつも叱られていましたが、家に帰ってみると遥かに良くなっていますので、私は秋雨を決してうらみはしませんでした。秋雨は「星雲」という結社を作り、歌誌『星雲』を発行していました。そのうちにその雑誌の片すみに私の歌も出るようになり、合同歌集『山桜集』にも載るようになりました。

私が歌に入ったのは以上のような次第ですが、後に作歌にうつつを抜かして受験勉強がおろそかになったために反省して、歌に夢中になるのをやめた次第です。

(おどろき さことあきら)